

令和7年度 第1回 国東市総合教育会議

1. 日 時 令和7年11月25日（火）
午前9時～午前10時
2. 場 所 くにさき総合文化センター 3階 会議室
3. 出 席 者

市 長	松井 督治
教 育 長	岩光 一郎
教育委員	松尾 泰二
教育委員	福永 泰信
教育委員	正本 律子
(事務局) 教育総務課長	村井奈穂子
学校教育課長	末平 誠
社会教育課長	黒木 宏一
文化財課長	染矢 裕美
給食センター所長	河野 昭郎
図書館長	都留 英基
学校教育課参事	石丸 理佐
学校教育課企画調整係リーダー	長木 正人
教育総務課総務係リーダー	河野 裕章
(庶 務) 総務課長	佐藤 克典
総務課秘書広聴係リーダー	金江 雄三
4. 協議・調整事項 部活動の地域展開について
5. 発言要旨 別紙のとおり

総務課長

おはようございます。

ただいまから令和7年度第1回国東市総合教育会議を開会いたします。

会議の進行をさせていただきます総務課長の佐藤と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、本会議の議長であります、松井市長からご挨拶申し上げます。

市 長

皆様おはようございます。

本日は大変お忙しい中、令和7年度第1回国東市総合教育会議にご出席いただきまして誠にありがとうございます。

また、教育長をはじめ教育委員の皆様方には日頃から本市の教育行政の充実・発展、そして、子供たちの健全育成のためにご尽力をいただいておりますことを感謝申し上げます。

さて、本日の総合教育会議の議題は、「部活動の地域移行・地域展開について」でございます。

国東市も国のガイドガイドラインを受けまして、将来にわたって、地域の子供たちが継続的にスポーツや、文化芸術活動に親しむ機会を確保・充実していくために、これまで学校単位で行われておりました、学校部活動を地域全体で連携して支える取り組みである地域展開に向けた検討を進めているところでございます。

本市では、サッカー、剣道、バスケットボールがすでに地域クラブとして活動しておりまして、他の複数の種目においても、地域クラブ設立に向けて、関係者による協議が進められていると伺っております。

しかしながら、今後もすべての部活動を地域クラブ活動に移行して、持続可能なクラブ活動を実現するためには、指導者の確保や活動場所、それから移動手段、費用負担のあり方など、様々な課題がございます。

本日は子供たちが安全で質の高いクラブ活動に継続的に参加できる仕組みを構築するために、現状の課題の整理や、今後の進め方などについて議論をさせていただきたいと思っております。

国東市の未来を担う子供たちが、夢と希望を持って健やかに成長できる教育環境の構築に向けて、教育委員会と情報共有を図り、より一層開かれた教育行政を推進していきたいと考えておりますので、本日は皆様の忌憚のないご意見をお願い申し上げます。

開会にあたっての挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

総務課長

ありがとうございます。

続きまして、岩光教育長にご挨拶をいただきたいと思います。

教育長

皆さんおはようございます。

松井市長におかれましては、ご多忙の中、総合教育会議を開催していただき、ありがとうございます。

また、日頃より教育行政の推進にご理解と多大なご支援を賜り、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

皆さんご存じのように、この総合教育会議は、本市の教育行政の重要な案件について、市長部局と教育委員会が一体となって共通認識のもとで方策を生み出すための、極めて重要な機会であるというふうに認識をしております。

今、学校現場では、グローバル化の進展、また技術革新などにより、教育のあり方が急速に変化をしてきております。

しかし、文科省はこれまでの教科指導と生徒指導を両輪としてきた、日本型の教育を今後も継承し、豊かな人間性の育成を目指していくとしております。

多様性の時代、これまでの教育を継続していくためには、学校教育だけでは十分に子供たちのニーズに応えられなくなっております。

地域社会や関係機関が協力して、子供たちの健全育成を支えていく取り組みが今後さらに必要になってきます。

学校現場では、今これまで子供たちの健やかな成長を支えてきた、中学校の部活動が少子化、教員の働き方改革といった社会環境の変化の中で、従来の学校指導型での指導が非常に難しくなっております。

そんな中、本日の総合教育会議では、学校部活動の地域展開を協議事項として取り上げていただきました。

これからの社会を生き抜く子供たちにとって、どのような部活動のあり方が必要なのか、また、そのために行政がどのように支援をしていけばよいのか、特に過疎化の進む国東市にとっての地域展開のあり方について、皆様と率直かつ建設的な、ご議論を重ねたいというふうに考えております。

結びになりますけども、本日の総合教育会議が国東市の活性化、さらには魅力的なまちづくりに繋がり、学校教育をはじめ教育行政をさらに前進させるための実りあるものとなりますよう、皆様の一層のご理解とご協力をお願い申し上げまして挨拶といたします。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

総務課長

ありがとうございました。

では早速ですが議事に入らせていただきます。

本日は部活動の地域展開について、皆様方にご意見を賜りたいと考えております。

これからの議事の進行につきましては、国東市総合教育会議運営規程第三条の規定により、本会議の議長である松井市長にお願いいたします。

市 長

それでは議事を進行させていただきます。

まず本日の議題であります部活動の地域展開について担当課より説明をお願いします。

学校教育課長

では、学校教育課より、部活動の地域展開につきましてご説明申し上げます。

（以下、配布資料に沿って説明）

まず、国の動向についてご説明します。

先ほど市長のご挨拶にもありましたが、この部活動の地域展開改革につきましては、急激な少子化が進む中でも、将来にわたって子供たちが継続的にスポーツ、文化芸術活動に親しむ機会を確保・充実していくという目標のもと取り組みを進めています。

国の方針では、令和5年度から今年度までの3年間を「改革推進期間」と位置付け、学校部活動に地域の部活動指導員や外部指導者が参画する「地域連携」や、学校の部活動が地域クラブに移行する「地域移行」などに取り組み、可能な限り早期の実現を目指す期間となっています。

続いて、来年度から令和13年度までの6年間は「改革実行期間」として、原則、休日についてはすべての学校部活動が地域で実施されることを目指す期間となっています。

このような国の動向を踏まえた国東市の現状とこれまでの取り組みですが、現状では、学校部活動への入部率は徐々に下がっており、令和3年以降さらに下がっている状況です。また、生徒数につきましても今後さらに減少していくことは明らかとなっています。学校部活動の種類は、運動部が6つ、文化部が2つあり、すでに地域クラブとして活動しているものが3つ（サッカー・剣道・バスケットボール）あります。

これまでの取り組みとしましては、令和3年度に部活動検討委員会を設置し、令和5年度に国東市の部活動ガイドラインを策定しました。

そして、今年度は部活動検討委員会に代わり、新たに地域クラブ推進協議会を設置したところであります。

市の学校部活動の地域移行・地域展開の方向性は次の4点です。

まず一つ目は、令和8年度末までに、平日を含めたすべての学校部活動を地域クラブ活動へ展開するための環境整備を進め、令和9年度から順次、地域クラブ活動へと展開していくことです。具体的な移行時期については、部活動ごとに異なると思っています。

二つ目は、部活動の種類により市内に1つ又は2つのクラブの設立を目指すことです。

三つ目は、今年度は可能な部活動競技から、地域クラブ発足に向けて土日の合同練習に取り組むことです。

それから四つ目は、学校部活動の地域展開と併せて、新たな価値の創造として、これまでの学校部活動になかった競技や種目についても、生徒の幅広い体験や活動の場として、地域クラブ活動に取り入れるというこの4つの方向性を持って進めています。

先ほどもお伝えしたとおり、市が抱える様々な課題に対する対応策を検討するために、市では部活動検討委員会を立ち上げておりましたが、それを終了しまして地域クラブ活動推進協議会に移行しました。

より幅広い関係者の意見を聴きながら、学校と地域が連携して、持続可能で多様なクラブ活動の環境整備を推進していくことを考えており、今月に第1回目の会合を持ったところであります。

その中で今後の課題として次の3点を整理しています。

まず一つ目は、指導者の確保、質の担保、育成支援です。指導や引率のできる人材確保には、やはり相応の対価が必要であり、併せて、指導者の質を担保するとともに新たな人材育成の取り組みも求められます。

二つ目は、練習場所、移動手段です。国東市の地理的事情や交通体系から考えると、平日に各中学校から移動して、練習をするということは非常に困難であるため、現状では、他自治体での事例を踏まえ、保護者による送迎を原則とすることが現実的であると考えています。

三つ目は、費用負担のあり方です。受益者負担と公費のバランスを考慮しつつ、受益者負担を一定程度に保つためには、市も応分の負担が不可欠であるため、この費用負担のあり方については今後具体的に検討していきたいと考えています。

以上であります。

市 長

説明がありましたとおり、令和5年度から7年度までの3年間を改革推進期間として、各種の連携や取り組みを進めてきました。しかし、指導者不足、練習場所の確保、移動手段の問題、そして費用負担などの課題が依然として残っています。

これまでの経緯を見ると、国がガイドラインを示し、県がそれを踏まえ自治体へ通達を行ってきましたが、具体的な財政支援や人的支援が十分に伴わないまま、各自治体に期限を区切った対応を求めたため、自治体の負担は大きくなっています。

そのため、令和5年度の大分県市長会でも、「国の方針だからといって、実行を押し付けるだけでは不十分ではないか」と、県に対して人的支援や財政支援など、より具体的な支援の提示を求める意見も出ました。

そのような状況の中、市の担当部署は関係機関と継続的に調整を行い、現在はサッカー、剣道、バスケットボールなどの競技で地域移行が進んでいます。他の自治体の詳細な進捗状況は把握していませんが、本市はかなり整理が進んでいるところです。

今後の課題としては、やはり指導者の確保、練習場所の整備、移動手段や費用のあり方について、引き続き議論を深める必要があります。

それでは委員の皆様、ご意見やご質問を自由にお寄せください。

突然この議題で議論を始めるのは難しい点もあるかと思いますので、まずはご質問からでも構いません。

正本委員

質問ですが、資料によると入部率が下がってきていますが、その原因はどのように分析されていますか。なぜ低くなっているのかお伺いします。

学校教育課長

以前、国東市ではほぼ全員が部活動に参加する、ほぼ100%に近い状況でした。しかし近年では、部活動は自主的な意思に基づく活動であるという考えが改めて認識されるようになり、それに伴って状況が変わってきています。

以前から自主性は求められていましたが、かつてのように「みんながやるのが当然」という雰囲気は薄れてきました。

その結果、部活動から離れる生徒が増え、参加者の減少が顕著になっています。参加者が減ることで、希望する活動も限られ、活動の多様性や活気にも影響が出ています。

背景としては、習い事や家庭での娯楽など生徒の日常に選択肢が増え、そして、YouTubeなどの動画コンテンツの普及も大きく影響していると考えられます。こうした環境の変化が、部活動の入部率の低下につながっているのではないかと見ています。

松尾委員

移動手段に関する問題についてですが、以前から、保護者による子どもの送迎や教職員による移動支援を含め、事故発生時の責任や負担の在り方が常に問題になってきました。

特に部活動に関しては以前からその問題が顕在化していますが、現在も当事者や保護者にとって負担が大きい点は変わらず、結果として保護者だけに負担が偏っているように感じられます。ですから、少なくとも事故が発生した場合に限ってでも、

公的な負担や支援の仕組みを検討できないかと思います。

保護者への負担がこれ以上偏らないよう、この点についてお考えを伺えればと思います。いかがでしょうか。

学校教育課長

多くの自治体で、移動手段の確保が大きな課題になっています。

外からは順調に見える取り組みでも、実際に進める過程で新たな問題点が見えてくるケースは少なくありません。

難しさの主な原因は、やはり財政的な制約と交通手段の確保です。国東市の場合、4つの中学校がそれぞれ離れているため、財政面に加えて移動にかかる時間的な制約も大きく、平日に移動して練習するのは現実的に難しいと考えています。

休日に集まって練習する場合は、ある程度保護者の負担や協力をお願いすることになると思います。現状では保護者の送迎を原則としており、仮にバスを運行するとなれば、事前のスケジュール調整や運転手の確保など運用面の課題が生じるため、実施は難しくなる可能性が高いです。もちろん、可能な支援策は引き続き検討しますが、現時点では保護者に協力をお願いするのが現実的だと考えています。

市長

現実的に言えば、保護者には費用だけでなく、万が一事故が発生した場合の責任などさまざまな負担がかかるのは事実です。

一方で、子どもが部活動が続けたいと望むとき、一校だけでは人数が足りずチームが組めないために「地域展開」や「地域移行」といった対応が必要になり、校区外の場所に連れて行ってでも活動させたいと考える保護者がいるのもまた事実です。

問題は、どこまでの負担を保護者をお願いするのかという点だと思います。費用負担に加えて、保険などの責任や安全対策の整備も重要です。従来のように「学校がすべて無償で対応し、保護者に負担がない」状況をそのまま維持することは難しくなっている現状があります。

今後は、保護者の負担をどのように分担・整理していくかが議論の焦点になるのではないかと思います。

福永委員

この教育委員会の会議でも、以前から部活動の「地域展開」が継続的に議題となってきました。そこで改めて確認したいのは、今後、学校現場の先生方がどのように役割を変えていくのか、先生方自身が部活動に対してどのように関わっていくのかという点です。

また、子どもたちが環境の変化に対してどう適応するのか、どのような問題が生じるのかも重要な検討事項だと考えています。

地域のクラブや個人、指導者を含めた受入れ側の体制や課題、役所や公的機関が財政面などでどのような支援を行えるのか、あるいは支援上の課題は何か、これらを曖昧にしたまま漠然と意見を交わすだけではなくて、部門ごとにもう少し掘り下げて丁寧に課題を洗い出し、一つずつ解決していくような議論の進め方が望ましいと考えます。時間的な制約はあるかもしれませんが、今後も継続して議論を深めていただきたいと思います。

私が特に懸念しているのは保護者の負担です。

金銭的負担や送迎の問題は各地域の学校で既に顕在化しており、送迎中に事故が発生した際の対応が毎年のように議論になります。これまでは基本的に送迎に使用した車の保険で対応せざるを得ず、それ以外に選択肢がほとんどないのが実情です。保護者がその扱いに納得しているのか、どの程度の負担が生じるのかは明確にしておく必要があります。

さらに、地域で指導に当たる方々が監督の立場を担えるのか、そうした人材は十分に確保できるのか、指導者が個人として関わるのか、組織の一員として関わるのかといった点や、そして先生方が顧問としてどのように関わり続けるのか、という点に関心を持っています。

学校教育課長

まず、教職員の関わり方ですが、部活動を地域に展開した後も、希望する教員がコーチや顧問として引き続き関わるができるように兼職・兼業を認める方向で制度の整備を進めています。この件については教職員の意向を把握するために、既にアンケートを2回実施するなど調査も行っています。

ただし、従来のように「顧問は必ず中学校の先生」という形にはこだわらず、教員が全く関わらないクラブや、教員が希望して指導に当たるクラブなど、多様な形態のクラブが市内に増えていくことになります。

だからこそ、学校とクラブとの情報共有は非常に重要だと考えています。地域で活動するクラブだからといって学校が無関係になるわけではありません。子どもたちの様子や成長、抱えている課題は学校と共有し、学校がアドバイスや支援を行える体制を維持する必要があります。チームの状況を学校が把握することで、学校側でもできる対応が見えてきますし、今後もそのような連携を続けていくべきだと考えています。

また、具体的な課題に対して迅速に対応することも重要です。計画を進める過程で生じた個別の課題については、解決策を検討するために新たに作業部会を設け、そこで個別の対応策を協議しています。さらに、先日発足した「地域クラブ活動推進協議会」で全体として議論・調整しながら、関係者が連携して実施していく取り組みを行っています。

市 長

例えば剣道では、武蔵町のB & G体育館で毎週水曜日に大人が活動しており、中学生や場合によっては小学生も参加しています。国東中学校でも地域移行後は週3回、小学生から社会人まで幅広い世代が集まって活動しています。

そうした従来のシステムが残っている地域では、指導者もきちんと確保されており、小学校から中学校まで地域一体で支えられる環境が整っています。

一方で、そうした体制がない地域では、まず指導者をどう確保するかが大きな課題で、現状ではそこが最も難しい点だと思われます。

今後、複数の部活動が地域移行される見込みですが、まだ移行できていない部活動に関しては、指導者の確認や調整が進んでいるのでしょうか。

学校教育課長

今後、地域展開を進めるにあたり、すでに学校の部活動に外部指導員として関わってくださっている方々に、活動の場を学校から地域へと広げていただけないか検討をしているところです。

お願いできる人材は現状それほど多くはありませんが、部活動指導員を中心に据えて進めていく方向で考えています。

市 長

これまで、部活動指導員は学校に来て指導していましたが、今後も同様の指導の場を確保する必要があります。

その点は学校側、あるいは教育委員会がフォローや支援を行っていくということによろしいですか。

学校教育課長

これまで一校で運営していたチームが複数校で合同チームを組む場合、従来と同じ練習場所で問題ないのか、地理的に中間な練習場所を設ける必要があるのかといった課題が出てきます。

また、そうした運営にかかる費用について、教育委員会がサポートできる部分はないかといった点も含めて検討しているところです。

正本委員

話を聞いていて、もちろん中学生が重要なのは当然だと思いますが、そのこだわりがあるせいで話自体が少し独特に感じられました。

私自身の経験を例にすると、子どもが3歳ごろからスイミングに通っていて、今は小学4年生なので通わせ始めて5、6年になりますが、毎週、私が送迎し、費用も負担しています。本人がやりたいと言うので私も続けさせていますが、結局のところ、負担は保護者にかかってくるのだなと実感しています。

今回、もともとある中学校の部活動が地域に移行するという事で、金銭や保険などの様々な負担が改めて問題として挙げられているのだろうと感じます。

小学校では、サッカーや野球のクラブでも保護者が携わることが多く、必ずしも顧問の先生がついているわけではありません。私も、もし負担してくれるなら助かるという気持ちもありますが、今後も子どもが行きたいと言う限り遠くのスクールまで送り続けようと思っていますので、既存の部活動に関わっている家庭と関係のないクラブに通っている家庭の扱いが不公平に感じられる点は残ります。

また、剣道では地域としてスポーツ振興を進めたい人がいて、小学校・中学校・高校と連携して取り組んで、制度として負担を軽減してくれる仕組みがあるのなら、それはとても良いことだと思いますが、ただ、学校との連携を進めるだけでなく、国東市自体が文化やスポーツを支えるクラブをつくるなどの方針を打ち出したら、もっとスッキリと考えやすくなるのではないかと感じました。

剣道もサッカーもバスケットも、その競技が好きで子どもたちに教えたいと思っている人たちがいて、その方々は競技人口を増やしたいという思いで続けてくださっているのだろうと思います。

中体連など中学校のスポーツの在り方が今後どうなっていくのか気になりますし、中学生だけが特別な立場に置かれている印象が、私には強く残っています。

学校教育課長

そう思う点は私もありまして、私の子どもも部活動ではなく、他市のスポーツクラブに通っていましたので、子どもがやりたいから親が当然送迎をするという感覚は非常によく分かります。

中学校の部活動は、日本独自の文化として、教職員が指導や世話をしてくれ、費用面でもあまり負担がないという面がありました。しかし、そのシステムも限界に近づいており、これまで中学校で当たり前だったことを、色々な方々の理解を得ながら地域へ展開していく必要が出てきています。変化は避けられない時期に来ているのだろうと思います。

とはいえ、いきなりスイミングなどのすべてを一度に移行するのは変化が大きすぎるという問題もあります。だからこそ、現在、中学校にある部活動を、地域に無理のない形で段階的に移行していくことを目指していく中で、ここで非常に難しいのはバランスであると感じています。家庭にかかる費用と公費の負担のバランスをどう取るかが極めて重要で、かつ難しい課題だと考えています。

今回、市が支援しようとしているのは「地域クラブ活動」に認定されたクラブへの支援です。認定を受けるため市のガイドラインを守ることが前提となるため、練習時間や指導方法などについては一定のルールを守ってもらうこととなります。また、支援により公費を投入する以上、市としても活動のあり方に対して一定の関与や介入をするのは当然だろうと考えています。

また、今後の中体連のあり方ですが、地域クラブとして認定されたクラブは中体

連の大会に参加することができます。すでに移行が進んでいる競技である剣道やサッカー、バスケットボールなど、特にバスケットボールはこれまで部活動がなかった中で体連の大会に参加できませんでした。が、地域クラブとして認定されてからは大会へ出場できるようになっています。

中体連の組織自体も、こうした変化に合わせて今後変わっていく必要があるだろうと考えます。

市長

以前は、子どもがやりたいことを続けさせるためには、小学校では親が送迎や費用を負担するのが普通で、中学校になると「学校でできる」という前提がありましたが、今の話を聞くと、昔の常識が通用しなくなっていることから、スポーツ少年団のような小学校の延長線上の取り組みを地域で継続し、外部指導者を受け入れて活動をする必要が出てきています。

だから、小学校では親が担っていた送迎や費用負担を、中学校の公的な枠組みから地域や民間のクラブへどう移行するかという点がここで大きな課題として挙がっているのだと思います。

以前、各町には強い少年剣道場があり、多くの子どもたちが通っていましたが、例えば武蔵町では7、8年前に道場が途絶えてしまいました。

そうした背景があるからこそ、国東地区の剣道連盟の方々は剣道の火を絶やさないよう、子どもたちに剣道を続けて欲しいという強い思いを持っており、そこに地域の協力と剣道を普及させたいという人たちの意志が合致すれば、中学生も加わって自然に活動を引き継げると思います。

昔は、武蔵町の少年剣道場では1月3日の稽古初めに中学生やOBである高校生、大人の指導者が集まり一緒に稽古をしていました。ですから、今、地域移行による国東中学校での活動は剣道連盟の方々に、特別新しいことを始めたという感覚はあまりないと思いますし、このように自然な移行が進むのが望ましいと考えています。

ただし現時点では、中学校の段階については、指導者や練習場所、移動手段といった点、特に費用面を市がどのように担うかということは今から議論していく必要があります。保護者の負担と公費投入のバランスについても慎重に検討しなければなりません。

また、地域クラブが発展すれば、小学校から中学校にかけての支援を地域で一貫して担い、地域内で全てを完結させるような体制になっていく可能性もあります。

サッカーのトリニータの下部組織のように、幼児からアンダー18まで継続するモデルが既にあり、実際、大分市内でも学校のサッカー部ではなく、トリニータユースに進む子どもがいるように、地域クラブが選択肢になるケースもあります。

ただし、今は中学校からの移行が始まったばかりの時期ですので、目先の対応だけでなく、子どもの人口減少や社会スポーツのあり方も含めた長期的な視点で、どのように進めていくかを考えていく必要があると感じています。

正本委員

私の知り合いに剣道をととても大切にしている方がいらっしゃって、その方は自分の子どもたちにサッカーや野球をさせない環境を作っていて、家には剣道の漫画しか置かず、広い園庭は不要だと考え、子どもたちに剣道にのめりこんで欲しいと、それほど剣道を愛しているのだと感じています。

私自身は大学時代にアメリカンフットボールのマネージャーをしていましたが、アメフトは少し特殊な競技で、草野球のように気軽にプレーはできない面もありますが、大学対抗OB大会が年に2回あり、熱心な人たちが集まっています。国東市にも野球を愛する人が多く、うちの主人もその一人で、国東に来てみて「野球が好きな町だな」と感じましたので、将来的には中学生も一緒に参加できるチームができるといいと思います。

今は移行期間でなかなか難しいかもしれませんが、中体連など中学生独自の大会がある時期だけは補助をする、あるいは中学生が参加しやすい仕組みを作る、そうした段階的な支援があれば、スポーツや文化に生涯をかけられる環境が整って、町の豊かさも増していくのではないかと、市長のお話を聞いて改めて思いました。

松尾委員

帰宅部の子をできるだけ減らすような魅力的な方法があれば考えて欲しいと思っています。

市 長

これは中学校ではなく、大分市の上野丘高校の事例ですが、ここでは文化部も含め、部活動への加入率を100%にすることを目標にしているという話です。「どれか一つに入りましょう」という学校ぐるみの方針で推進すれば、結果としてほとんど全員が部活動に参加することになります。

学校としては「学業以外に何か一つ、興味を持って取り組ませたい」という意図があるのだらうと思います。

ところで、どこかの中学校で、学校として部活動加入率100%を目指すという方針を掲げているところはあるですか。

学校教育課長

市内の中学校ではそのようなことは行っていないませんが、教育的価値のある活動だと捉えていますので、積極的に声かけは行っているのが現状です。

市 長

松尾委員がおっしゃったように、本当はやりたい気持ちがある子どもでも、きっかけがない、その部活動が何をしているのかわからないということで消極的になっ

ている場合が多いと思います。

地域移行はそうした子どもたちにとって一つの契機として、地域のクラブに同級生が行って「すごく楽しいよ」と感じられる雰囲気を作れば、「誘われたから入ってみようかな」といった参加の流れも生まれると思いますので、クラブ活動の地域移行をマイナス面だけで捉えるのではなく、そうしたプラス面をどう生かしていくかを検討する必要があると思います。

学校教育課長

帰宅部の件ですが、どこにも所属していない子どもを減らしたいという思いは強く、大変重要だと考えています。

なぜ部活動の加入率が下がっているのかというお話もありましたが、自分のやりたいことに出会えていない子どもがいるのではないかとということで、市としても、資料にもあります「新たな価値の創造」の一環で、学校へ指導者を派遣し、部活動に入っていない子どもも含めて、例えばタグラグビーやバドミントンといったさまざまな競技に触れる機会を設けて、深く取り組ませるのではなく、まずは浅く体験させて「楽しい」「もう少しやってみたい」と思える出会いの場をつくることを目指しています。

「新たな価値の創造」ということで、単に競技力を高めることを目的にするのではなく、生涯にわたって親しめるスポーツや種目に出会える場を創出したいと考えています。

市長

楽しいクラブにしていくにも、指導者が不足しているという問題があり、そのことで皆さん真剣に悩まれていると思いますが、意外と地域に「教えられる人」がいらっしゃると思っています。たとえば正本委員がおっしゃったように、ご主人が野球好きで、どこからか「指導して欲しい」と頼まれることがあるかもしれませんし、色々な競技にもそういう人は結構いらっしゃるのではないのでしょうか。

私自身の経験をお話しすると、大分市にいたとき、西中学校や西の台小学校、春日町小学校などで活動していました。土曜日は春日町小学校で、平日の夜は都合がつくときに西中学校に行き、上野丘高校などの練習も時間をみて見学や手伝いに行き、夏の稽古や寒稽古など、機会があれば参加していました。正式な指導者というよりは、何人かいるうちの一人として一緒に練習に参加することで、私自身も楽しんでいました。

おそらく国東市でも、いろいろなスポーツを経験した人で「今もやりたい」と思っているけれど事情があって続けられない人はいるはずです。もし地域にクラブがあれば、教えるまでいかなくても一緒に汗を流したり、少し助言したりできる人が集まるでしょうから、そうした人たちを巻き込んでいけば、より楽しいチームができると思います。

ですから、指導者を一人だけ決めて「これで形が整いました」とするよりも、そのスポーツが好きな地域の人たちが集まり、子どもたちをみんなで支えるという形も十分ありだと、今日のお話を聞いて改めて感じました。

正本委員

上野丘高校の科学部の活動などがよく新聞に取り上げられていますが、私たちがまだ知らない楽しい部活が他にもあるのかもしれないと思いますし、そうした出会いの場があるといいなと感じます。

私ならこの中では吹奏楽に入りたい、スポーツは苦手だし、音楽以外はちょっと…というように、得意・不得意で入りたい部活が限られる人もいると思います。

例えば絵を描きたい人にとっては、顧問の先生がいなくても、美術の得意な方が教えてくれればありがたいと思いますけど、学校で自分たちだけで絵を描くことぐらいはできますし、個展を開くこともできるでしょうから、中学生・高校生になってから「こんな部活があるのか」と知るのではなく、事前に紹介する機会があればよいと思います。

うちの主人の姉の話ですが、子どもは高校を卒業しているのに、まだ高校のクラブのために炊き出しに行っています。他校から来る生徒のために大量の料理を作る必要があるからだそうで、そういうボランティア的人材を見つけて参加してもらうことは大切だと感じました。学校側が「料理をたくさん作れる人」をうまくつかまえて活動に活かしているのだなとも思いました。

私も地域の人を巻き込む取り組みで「なっちゃんの家」に関わっていて、今度で3回目の茶道体験はとても人気で「またやりたい」という声が多いのですが、講師の方が来てくださるのは茶道を広めたいという思いからでしょうし、茶道では掛け軸や花、器などさまざまな要素を学ぶ必要があり、いろいろな技術に触れる良い機会になります。こうした文化体験の場を増やして、いろんな文化が体験できるまちをつくっていったらいいなと思います。

学校教育課長

この地域展開の機会をぜひ有効に活かしたいと考えていますので、今ある学校の部活動を地域に移行することも大切ですが、それに加えて新たな価値ということで、例えば、伝統芸能を学べる場や、写真や絵画に興味を持つ子どもが参加できる場など、文化的な活動などについても子どもたちが触れる機会をつくっていきたいと思います。

そうした活動を指導できる人をどうを見つけるかについては、国東市でコーディネーターを2名採用しています。1人は学校の部活動に詳しい中学校のOB、もう1人は地域の活動に幅広く関わっている方で、そうしたコーディネーターからの情報を得ながら、子どもたちのニーズも把握しつつ、良い出会い方ができるよう進めていきたいと考えています。

市 長

これまでも学校で行われていたような文化活動でも、地域にはそれを趣味で続けている人や、プロ並みの腕を持つ人がいらっしゃるかもしれませんので、そうした人たちと出会うことは子どもたちにとっても良い刺激になりますし、スポーツや文化系も含めて、地域の大人とより多く交流することで多様な価値観に触れられる点は大いに意義があると考えています。

福永委員

先ほど市長のお話にもありましたが、ゆくゆくは中学校という枠にとらわれず、地域のクラブチームへ移行していくのが理想であり、現実的にもそうならざるを得ないのではないかと考えています。

ただ、学校が関わる部分が残ることにやり辛い面、やはり難しさがあり、正直なところ私自身もその点を感じています。

これまで中学校の部活動は学校生活の一部として位置づけられてきましたので、その考え方をゼロから見直して新しい形に切り替えていくのは簡単ではありませんが、地域移行は進んでいくのだらうなと思います。

また、いろいろな活動を進める上では指導者の確保が重要になりますが、競技の経験者だからといって指導がうまくできるとは限りません。指導者に求められる資質や子どもたちへの向き合い方は、以前にも増して厳しく問われていて、スポーツ少年団などでも研修は行われていますが、研修で理解していても現場に立つと感情が先走って行き過ぎてしまう場合もあって、これは指導者だけでなく手伝ってくださる方や保護者にも言えることです。

保護者の関わり方にも温度差がありまして、例えば応援の際にみんなで揃いのシャツを作りたいという気持ちはよくわかりますが、熱心な方とあまりそうでない方がいると、保護者同士で摩擦が生じることがあります。同じ学校内であっても意見が合わないことがあるのに、子どもたちが別の地域のチームに移ると、さらに新たな問題などが出てくるのかなと思います。

これから少しずつ変わっていくと思いますが、子どもの人数が減る中で、この活動を通して、どのような力を身につけてほしいのかを時代に合わせて考える必要がありますし、単に体を鍛える、体を動かすだけでなく、学校外の活動を通じて多様な人と触れ合うことは、スマートフォンでの単純な文字のやり取りとは違い、もう少し踏み込んだ言葉の交わり方などを学ぶ良い機会になると思いますので、こうした経験を通して、子どもたちが言葉の使い方を身につけ、心も成長していってくれればと考えています。

市 長

そろそろお時間となりました。

本日すぐに結論が出るわけでも、何かしらの方策が見つかるわけでもありませんが、多くのヒントをいただいたと感じています。

皆さんのご意見を参考にさせていただきながら、部活動の地域移行・地域展開がより良い形で進められるよう、皆さんと引き続き連携して取り組んでまいりたいと考えています。

総務課長

皆様には貴重なご意見をいただき、大変ありがとうございました。

以上をもちまして、令和7年度第1回国東市総合教育会議を終了いたします。

本日はありがとうございました。